

## きつねの首（氷上町）

むかし、丹波の国磯（いそ）（石生（いそう））の里に、長者（ちょうじゃ）がすんでいました。その長者の広いやしきのすみに、長者稲荷（いなり）が、まつってありました。

そのやしろには、古ぼけたせとものきつねが、おいてありました。いつのころからか、わかりませんが、毎年、このいなりの春祭には、このせとものきつねを、遠くはなれた山すその古池で、夜中の十二時に、きよめるならわしがありました。

それは家の者の中から、くじびきで、年初めの正月に、きめることになっていました。

ことしは、十五才になったばかりの女中のあけみと、きまりました。いよいよあすが、いなりの春祭という夕方です。

長者は、あけみをよんでいました。

「いいな、このきつねは、昔から、つたわっている大切なきつねさまだ。こわさないように、きをつけておくれ。もし、こわしでもしたら、先祖（せんぞ）さまに申しわけないので、おまえを家におくわけにはいかぬ。」

「きをつけて役目ははたします。」と、あけみは、水で身をきよめ、この役が、ぶじにおわるようにいのりました。

その夜中、あけみは、きつねをおさめた木の箱を、両手でかかえて、やしきをでました。

夜空には、すみきった月が、うかんでいます。時々、さっとふきとおる風は、首すじをなでていきます。

「やっぱり、きみがわるいな。ひきかえそうか。」

あけみは、ときどき、そっと、うしろをふりかえっては、あたまのしんが、ジーンとなるのを、感じながら、やっと、山すそにたどりつきました。

その古池は、小さいものですが、里人たちは、こけむした岩の上に、水神さまをまつっていました。

あけみは、水神さまに、あたまをさげてから、せとものきつねを、水につけて、あらいはじめました。つめたい池の水で、指が、ちぎれ、ごごえそうでしたが、ていねいに、きつねの耳の先から、しっぽの先まで、あらいきよめました。

「さあ、これでいい。この布で、水をふきとったら、おしまい。」と、きつねのあたまをふいていたときです。

コクツと、かすかに手ごたえがして、ころりと、きつねの首がおれてしまったのです。

「ワァー、たいへんなことになった。どうしよう。」

あけみは、しばらく、ぼんやりしていましたが、やがて、おちたきつねのあたまをひろって、くっつけようとした。が、いったん、はなれた首が、くっつくわけありません。

あけみは、首のおれたきつねを、木の箱に入れて、とほとぼ、帰ってきました。

「あけみ、ごくろうだったな。おやおや、どうかしたのかい。げんきがないぞ。」

門のところで、むすこの太郎が、でむかえてくれました。

あけみから、わけをきいた太郎は、

「しんばいするな。わしがひきうけた。」と、いって、大声をだしました。

「オーイ、たいへんだ。たいへんだ。きつねの首をもぎとってしまったあ。」

祭りのしたくをしていた家の者が、あわててやってきました。

「なに、きつねの首をもぎとったと。た、たいへんなことをしてくれた。だれがとったのだあ。」と、大声をあげたのは長者でした。

「おとうさん、すみません。」と、太郎が、あやまりました。

「う、おまえか。いなりさんの、おいかりがおそろしい。おまえでもゆるすわけにはいかぬ。かんどうだ。すぐ家をでていけ。」

サツと、顔いろをかえた太郎は、なにもいわず、門をでていこうとしました。

「まってください。こわしたのは、わたしです。太郎さんは、わたしをかばってくださったのです。」と、あけみは、長者のあしもとに、手をつきました。

「えっ、おまえがやったか。そうとわかれば、おまえに、でていってもらおう。」

そう、長者がいった時でした。うばのおきぬが、でてきました。

「だんなさま、それをこわしたのは、じつは、このわたしです。去年、こわしたのです。こわかったので、こっそり、のりでくっつけておきました。あけみに、つみはありません。ゆるして、やってください。」

「なに、おまえが、こわしていたのか。よく、一年間も、おれをだましていたな。おまえをゆるすわけにはいかぬ。」と、長者は、おきぬをにらみつけました。

その時、むすめの八千代が、いいました。

「おとうさん。それ、おきぬじゃありません。じつは、一昨年、私が池でこわしたのです。おきぬにそうだんして、のりでくっつけてもらったのです。」

「ううん、こわしたのは、八千代というのか。ああ、わからなくなった。ほんとうに、こわしたのはだれなんだ。」

長者は、かわいがっている八千代を、おいだすこともできず、頭をかかえて、すわりこんでしまいました。

そこへ、のそのそと、でてきたのは、吉じいやでした。

「おらが、みんな、していますだ。」と、長者のまえにすわって、はなしだしました。

「はい、おらが、ほんまのこと、はなしますだ。いままで、だれにも、いっちゃんらねえと、おもっていただが、こうなったら、だまっているわけに、まいらねえ。」と、しばらく、ことばをきって、

「ずっと、ずっと、前、なくなられた、ごいんきよさまが、こわされたのを、おらが、くっつけておいただ。」

こういって吉じいやは、しばらく、じっとしていましたが、きつと、かおをあげました。

「だんなさま。おねがいがござえますだ。こんなこと、おらのいうこっちゃんええことだが・・・。きつねさまも大切じゃが、そのきつねさまのために、毎年、きをつかうおいらは、かわいそうですが。これをしおに、かんがえてくだせえ。」

そこにいる家の者たちは、吉じいやが、長者に、ひどく、しかられないかとあんじました。

しばらく、だれも声をだしません。春祭のごちそうのにおいが、ぶーんとおってきます。

「そうだったのか。いや、わるかった。みんなを苦しめていたんだなあ。」と、長者は、目ざめたようにつぶやきました。

「わしも、きがつかなんだ。この家の宝物とは、何かということな。吉じいやの意見でわかったよ。ほんとうの宝物が。いま、ここで、私に見せてくれたかばいあう心が、私の家にとっては、きつねよりも大切な宝物だと、わかった。このきつねに、私は、まどわされていたのだ。」

こういって長者は、せとものきつねを、庭石へ、たたきつけようとした。

「あっ、だんなさま、まってください。」と、吉じいやは、長者の手をおさえました。

「そのきつねさまも、ご先祖からうけつぐ宝物。こわさないでくだせえ。ただ、何よりも、人の命の方が、大切であると、考えてくださりや、わしらは、幸せでござえますだ。」

「じいや、ありがとう。」と、いった長者は、目からなみだをほとりとおとしました。

「だんなさま、よろしく願います。」と、家の者も、なみだ声で、口々にいいました。

その後、この家の者は、みんな、楽しくすごしたということです。

